

Q：香美市もロケ地として選定されました。香美市での撮影の際、倉崎さんを含め制作陣やキャストの皆さんは、香美市に対してどのような印象を持たれていましたか？

A： 2023年から取材を始め、やなせたかし記念館や先生のお墓など、香美市内を自分の足で歩いて回りました。ミュージアムからお墓まで数十分かけて歩いたこともあり、地域の風景や空気を肌で感じる事ができました。昔ながらの建物が残っている場所もあり、香美市ならではの魅力を強く感じました。私たちはどの作品でも“ロケーションの力”を大切にしていますが、香美市は東京のスタジオや近郊では再現できない空気感があり、本作のクランクインをこの地で迎えられたことは非常にありがたかったです。出演者の皆さんも香美市での撮影をとて喜んでいて、ロケ中だけでなく1カ月後や半年後にも「香美市から始められて本当に良かった」と口々に話してくれていました。役者にとっても、作品のスタート地点として大きな意味があったのだと思います。

◀ 香美市の皆さんからの寄書きにも、一つひとつ目を通してくれました♪

Q：視聴者から反響の大きかったシーンや台詞があれば教えてください。

A： 第6週の豪（細田佳央太さん）の出征のシーンですね。今でも「あの場面が一番好きです」という声を多くいただいている、私たち制作側にとっても非常に思い出のある、大切なシーンです。この場面は、物語のテーマのひとつである“与えられた命をどう生きるか”という問いを強く投げかけるものであり、また“自分の思いは、伝えなければ伝わらない”という普遍的なメッセージも込められています。だからこそ、あのシーンを通じて登場人物たちが互いに思いを伝え合うようになり、視聴者の皆さんにも、限られた時間の中でどう生きるか、どう思いを伝えるかを改めて考えていただけたのではないかと思います。

Q：倉崎さんにとって、「あんぱん」はどのような存在になりましたか？

A： 一言で言うなら、「あんぱん」は私にとって“宝物”のような作品です。これまでに「エール」など、さまざまな朝ドラに関わってきましたが、監督やプロデューサーとしての立場を超えて、ゼロから立ち上げるところから携わらせていただいたのは「あんぱん」が初めてでした。その分、より深く関わることができ、特別な思い出のある作品になりました。また、これまでの人生すべてがこの作品に繋がっていたように感じています。自分自身、ずっと“どう生きるか”という問いに悩み続けてきた人生でしたし、やなせ先生の「アンパンマンのマーチ」の歌詞にある「何のために生まれて、何をして生きていくのか」という言葉は、10代の頃からずっと心に残っていたものです。人の感情を揺さぶるような作品を生み出したいという思いが、自分にとっての一番の幸せであり、ドラマという仕事を続ける意味でもあると改めて気づかせてくれた作品でした。

**Q：これから、どのような作品を手掛けていきたいですか？
また、放送決定から応援し続けてくれた香美市のみなさんに一言お願いします！**

A： これからも、人の感情を深く揺さぶるような作品を作っていきたいと思っています。そしてそれを、日本だけでなく世界中の人々にも届けられるような作品を作りたいと思います。最後になりますが、香美市の皆さんには、収録期間を含めた1年間、本当に温かく見守っていただき、心から感謝しています。皆さん一人ひとりの応援が、私たちの背中を押してくれましたし、“一緒にこの物語を作っている”という気持ちにさせていただきました。これからも皆さんの日常の中で、「あんぱん」がどこかに存在し続けてくれたら嬉しいです。本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いいたします。



あんぱん室（やなせたかし先生顕彰事業推進室）より

昨年の広報8月号から掲載してきた特集「こちら、あんぱん室！」を毎月楽しみにしていただき、本当にありがとうございました。皆さんの温かい応援と活動が、香美市の盛り上がりにつながりました！連続テレビ小説「あんぱん」の放送は終わりましたが、やなせたかし先生の顕彰はこれからも続いていきます。

また、本特集も今月号で最終回となりますが、やなせたかし先生や「あんぱん」に関する話題があれば、引き続き広報香美でお届けしますので、これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。ほいたらね～！

祝 スペシャルインタビュー 「あんぱん」制作統括 倉崎憲 さん

Q：連続テレビ小説「あんぱん」の制作発表から早くも2年が経とうとしています。放送が終了した今の率直な感想をお聞かせください。

A： 率直に言って寂しいですね。放送が始まってから終わるまでが本当にあっという間で、1年前に高知でのロケが始まったと思ったら、もう最終回を迎えてしまったという実感です。毎日の収録、そして半年間の放送を通じて、視聴者の皆さんからたくさんの反響をいただきました。それが当たり前のことではないと気づかされ、本当に幸せな時間だったと思います。やっぱり、走っている最中が一番幸せなんだと改めて感じました。8月にクランクアップしてからは、これまで百人規模で動いていたスタッフや、数百人規模の関係者の皆さんが次の作品へと移っていくのを見て、少しずつ現場の空気が変わっていくのを感じています。一緒に走ってきた仲間が別の道へ進んでいくのは寂しいですが、それでも「あんぱん」という作品が、皆さんの心に残り続けてくれたら嬉しいです。

Q：倉崎さんの中で印象的だった「あんぱん」のシーンやエピソードを教えてください。

A： やはり今年が戦後80年という節目でもあり、終戦後、のぶ（今田美桜さん）と嵩（北村匠海さん）が久しぶりに再会する長いシーンが特に印象に残っています。あの場面は、戦争を経て価値観が180度変わった二人が、これから何を大切に生きていくのかを模索していく、象徴的なシーンだったと思います。中園ミホさんの脚本による丁寧な会話のやりとりがとても印象的で、あのシーンがあったからこそ、最終的にアンパンマンが生まれるまでの流れに深みが出たのではないかと感じています。物語の終盤につながる大切な場面でした。

Q：物語のモデルとなったやなせ先生ご夫妻の人生をドラマに落とし込むうえで、特に苦労された点がありますか？

A： 嵩のストーリーについては、やなせ先生の自伝やインタビュー番組、アーカイブ映像などの資料が豊富にありましたので、比較的構成しやすかったのですが、のぶのストーリーに関してはほとんど資料が残っておらず、キャラクターやエピソードを一から創り上げる必要があり、苦労しました。物語をどのように最終週へとつなげていくかについては、制作チーム内で何度も議論を重ねながら進めて、放送された最終週となりました。

Q：今田美桜さん演じるのぶと北村匠海さん演じる嵩の魅力を教えてください。

A： まず今田美桜さんについては、オーディションでオファーさせていただきましたが、彼女がいるだけで現場が明るくなるような存在で、それは演技にも表れていました。彼女のシーンに対する読解力が本当に素晴らしいんです。台本の一枚のペラから物語全体の意図を瞬時に読み取り、自分の中で消化して芝居に落とし込む力がある。さまざまな時代を描いた本作の中で、のぶというキャラクターの心情を的確にとらえ、演技に反映させてくれました。北村匠海さんについては、10代から70代までの嵩を演じるにあたり、最初から晩年を見据えて役作りをされていたのが印象的です。たとえば、若い頃の歩き方ひとつにしても、晩年の姿を逆算して演じていたり、みなさんがイメージするやなせたかしになるためには、どの年代で陽気さやユーモアを足していくのかなど。1年間にわたる撮影の中で、彼が戦略的に積み上げてきた役作りの深さには、本当に感服しています。

Q：「あんぱん」には、香美市出身の樫尾篤紀さんや南国市出身の瞳水ひまりさん、土佐ことばの指導もした西村雄正さんなど、高知県出身者も多く携わりましたが。

A： 皆さん本当に素晴らしかったです。高知がご当地の作品ということもあり、なるべく高知出身の方にも出演していただきたいという思いがありました。実は、樫尾篤紀さんは、千尋役のオーディションにも参加されていたのですが、彼のピュアな人柄や芝居に対する熱意がとても印象的で、最終的に伊達先生役として出演いただきました。瞳水ひまりさんや西村雄正さんもそうですが、皆さんとても素敵でした。

